

序論

クリスマスを待ち望むアドベントのこの時期、みなさんとともに礼拝を捧げることができます恵みを覚えて感謝いたします。

この季節には、世界中でクリスマスツリーが飾られ、街もイルミネーションで溢れます。見慣れた街並みが、いつもと違う装いに色づくのを観るのは、いつのころからか冬の風物詩となり、楽しみとなりました。クリスマスが、「イエス・キリストの誕生」を祝う日であることは、一般の方々にも広く知られるようになりました。ただ、その本当の意味となると、果たしてどれだけの人々が意識しているのか疑問でもあります。特に、この日本ではクリスマスの意味を心に留めつつ、お祝いするという幸福をどれだけの人々が味わっていることでしょうか。

ヨハネが語るクリスマスの意味

今朝のみことばは、ヨハネの福音書の1:1-14にいたしました。これは、ヨハネの福音書の冒頭部分になります。他の福音書ですと、冒頭部分には、クリスマスのストーリーが来ています。天使ガブリエルによるマリアへの受胎告知、遠い東の国からやってきた3人の博士たち、夜番をしていた羊飼いたちに天使があらわれて、救い主の誕生を告げる物語、これらは何度聞いても飽きることのないクリスマスの物語です。

それと比べると、ヨハネの福音書の語り出しは独特です。「初めにことばがあった」というフレーズはとても印象的で、「ことばは神とともにあった。ことばは神であった」と続いていく語り口は、神秘的で、不思議な雰囲気を持ち、どこか哲学的ですらあります。

ある先生は、ヨハネ福音書の特徴の一つを言い表すのに「天からの視点で語られている」とおっしゃっていました。他の3つのマタイ、マルコ、ルカの福音書が、この地上においてイエス・キリストを目撃した人、一緒に過ごした人の確かな証言であり、キリストの生涯を物語っていくという特徴をもっているとするならば、ヨハネの福音書はこのお方(イエス・キリスト)の生涯に、どのような意味があるのかを天からの視点によって解き明かしているといえます。

私も、今回、準備をしながら、確かにそうだなと思いました。ヨハネは、「ことば」、「いのち」、「光」などの平易な言葉を使いつつ、大胆に、力強く、イエス・キリストについて語っていくのですが、そこには人の考えの及ばない、深い内容が語られているのを思わされます。

今日は、その「天からの視点で語られた」クリスマスの意味について、特に9節のみことば＝「**すべての人を照らすそのまことの光が、世に来ようとしていた**」に目を留めて考えていきたいと思っています。そしてその際に、ヨハネの福音書が「天からの視点で語られている」ことを考慮していくことが、理解の助けになってきます。それは、平たく言えば、「神とどう関係しているか」ということです。

まことの光

「**すべての人を照らすそのまことの光が、世に来ようとしていた**」

今朝、このみことばから学びたい、第1のポイントは、イエス・キリストは「まことの光である」ということです。わざわざ「まことの光」と言うのは、そうではない「光」もあるということです。いわば「偽りの光」とでも言うべきものです。この偽りの光については、また後で触れます。イエス・キリストは、そういう「偽りの光」ではなく、「まことの光」だということです。

では、「まことの光」とは何でしょうか。ヨハネはここで何を言いたいのでしょうか？この箇所は、本

当に内容が濃いので、もう先に結論を言ってしまいます。いろいろと説明するよりも、その方が見通しが良くなるからです。結論を言うと、「まことの光」という言葉でヨハネが言おうとしているのは、「まことの神である」ということです。ヨハネはここで、イエス・キリストは、ただの人間ではない、本物の「神」なんだと言っているのです。

順に見て行きましょう。「まことの光」と言われているお方は、10節でこう言われています。「この方はもともと世におられ、世はこの方によって造られたのに」。これと同じ内容が、1節から3節にでてきます。ただ、1節から3節では、ヨハネはイエス様のことを「光」ではなく、「ことば」と表現しています。

「1初めにことばがあった。ことばは神とともにあった。ことばは神であった。2この方は、初めに神とともにおられた。3すべてのものは、この方によって造られた。造られたもので、この方によらずにできたものは一つもなかった。」3節には、「すべてのものはこの方(=ことば)によって造られた」とあって、一方10節では「世はこの方(=まことの光)によって造られた」と言っているわけです。つまり「ことば」も「まことの光」も、イエス・キリストのことを言っています。そして、「ことばは神であった」というわけですから、「まことの光であるイエス様は、神である」ことになります。

また、14節を見てください。14節「ことばは人となって、私たちの間に住まわれた。」、この部分は9節「すべての人を照らすそのまことの光が、世に来ようとしていた」と同じことを語っています。どちらも、神であるお方=イエス・キリストが、私たちが住んでいるこの世に、人となって来られたという、驚くべきことを主張しているのです。このあり得ない出来事が実現したのが、クリスマスです。

イエス・キリストは「世」に来てくださった

「すべての人を照らすそのまことの光が、世に来ようとしていた」

今朝、このみことばから学びたい、第2の点は、「イエス・キリストは世に来てくださった」ということです。「世」とは、神さまがことばによってお造りになられた、この世界のことで、私たちが生きているこのリアルな世界です。もし、「まことの光」が私たちの世界に来るなら、そして今お話ししたように、それが「神」のおとずれであるなら、どんなに輝かしく、まばゆい光を、私たちは期待することでしょうか。それは、どんなに素晴らしいことかと心が躍るはずですよ。

ところが、10節、11節を見ると「世」の反応はそれとは違っていました。10-11節「この方はもともと世におられ、世はこの方によって造られたのに、世はこの方を知らなかった。この方はご自分のところに来られたのに、ご自分の民はこの方を受け入れなかった。」これが「世」の反応です。これが私たち人間の、神様に対するリアルな反応です。この世界を作り、私たちを作ってくださいとお方のことを知らないでいる。これが人間の現実です。

第一のポイントで、「イエス・キリストはまことの光である」と説明しました。そして、このお方が「神である」とも言いました。これは、すでに神様を信じているクリスチャンにとっては、うなずける真理です。しかし、世の大多数の人々にとっては受け入れがたいことであり、良く分からないというか、理解し難いことです。かつては私たちもまた、そんなことはあり得ないと疑い、怪しみ、訝しんで、距離をとって、執りあわなかったのではなかったでしょうか。私たち人間にとって、それはあり得ない、ばかばかしいことなのです。

さきほど、「まことの光」に対して、「偽りの光」も光もあると言いました。

そして、この「世」においては、多くの人が、神ではない別の「光」=「偽りの光」を見つめて、それを追い求めています。ある人にとって、それは「良い生活という光」かもしれません。また別の人にとっては、「社会的なステータスの輝き」かもしれません。あるいは「健康」であったり、「美容」、なにかの「生甲斐」や「やりがい」といったもの、もっと漠然とした「しあわせ」と言われているものかもしれま

せん。それは、その人にとっては、是非とも手にしたい「光」です。これらは一概に悪いものばかりとはいえません。むしろ、どこか人を引き付けるキラリとしたものがあり、それなりに人を元気にする何かを持っていることでしょう。

しかし、それらは、決して「まことの光」ではありません。それらは「神」ではありませんし、「神」の代わりとなるものではありません。一時的に、私たちの思いを満たしたり、元気づけたりすることはできても、私たちの心の本当に深いところを満たすことも、私たちにいのちを与えることもできません。

みなさんは、今の世の中を見て、どのように感じておられるでしょうか？子どもの頃は、世界はもっと平和で楽観的でいられたように思います。それはただ単に、私が子どもで、世の理不尽から守られていただけなのかもしれません。世の中は進歩していると思っていましたし、科学の発展がいろいろな問題を解決してくれると信じていました。しかし実際にはそうはなりません。たしかに科学技術は飛躍的な発展をとげました。昔ならば夢のようなことを実現できるようになりました。しかし、世界は依然として、解決できない問題で山積みです。それどころ、国と国が争い、世界は不安定化し、世の中はどんどん混沌を深めているように思います。

わたしたちの社会も、ストレス社会と言われて久しいですが、生き辛さを覚える人が増え、心を病む人が増えました。みんな何かに追われるかのようにして必死で生きています。自分の目にひとときわ明るく見える「光」を追い求めているようでいて、実のところは、みんな、得体のしれない不安に追い立てられているだけなのでは？とも思うのです。運よく求めていた「光」を手にしたとしても、やがてまた別の何かを求めざるをえない、決して満たされることのない道に、不安を抱えたまま放り出されているかのようです。この道の先に、解決はありません。

聖書は、そういう私たちの状態を「暗闇」の中にいると言うのです。「闇」とは、「まことの光」がない状態のことを言います。つまり「闇」とは、まことの光である「神」が不在であることです。神を知らずにいること、神を知ろうとしない事、それこそが「闇」なのです。私たちの深いところを本当に満たすことのできるお方を知らずにいるのです。いろんなことを知っていて、本当に賢い頭が良い人であっても、神を知らないでいるなら、その人は暗闇の中に生きています。自分をお造りになった神を知らず、受け入れずに拒んだ「この世」は、「暗闇」に覆われています。イエス・キリストは、この「闇」の中にお生まれくださいました。暗闇の中にいる人のところに、主イエスは来てくださり、そして、「わたしはあなたがたに平安を与える」（ヨハネ14：27）と言われました。そして、さらに「わたしがあなたがたに与えるのは、世が与えるのとは違います」と約束してくださいました。

すべての人を照らすために

「すべての人を照らすそのまことの光が、世に来ようとしていた」

今朝の第3のポイントは、イエス・キリストは、「すべての人を照らすため」に、この世に来られたということです。ここで、先に進む前に、少し立ち止まって、「光」と「ことば」に共通するイメージを確認しましょう。「光」と「ことば」のどちらのイメージにも共通なのは、「何かを指し示す」ことができるということです。14節には、「私たちはこの方の栄光を見た。父のみもとから来られたひとり子としての栄光である。この方は恵みとまことに満ちておられた。」とありました。ここに、このお方=イエス・キリストの栄光は、「父のみもとから来られたひとり子としての栄光」とあります。その栄光の源は、「父なる神様のみもとから来た」というところにあります。つまり、父なる神様との関わりにおける栄光であり、必然的に「神を指し示す光」となっているのです。

また、イエス・キリストが神の「ことば」と言われるとき、それは私たちにに向けた語られた神の

「ことば」であるということです。このお方を通して、私たちは神がどのようなお方であるのかを知ることができます。ヨハネの福音書では、度々、イエス様は「わたしを見た者は、父を見たのだ」(ヨハネ12:45, 14:9)とおっしゃっていました。イエス・キリストは、「すべての人」に、父なる神の愛を伝え、神を指し示すお方です。それが、「すべての人を照らすまことの光」であるということの意味です。

さて、もしも、暗闇の世の中で、終わりのない不安の中に立たされているのであれば、その人にとっては、何が解決になるのでしょうか。それは絶対的な安心・平安が与えられることです。そして、それを与えることができるのは「神」だけです。私たち人間にとって、「神に受け入れられているという深い安心・平安」を得ることは、決定的なことです。人間にとって、「神に愛されていることを知る」のは、決定的な出来事であり、その人の人生を変える力があります。

しかし、闇の中にいる人が、自分の力でその闇を打ち破ることはできません。そこに、「まことの光」が射し込み、「神のことば」が響かなければなりません。神について証しし、神の愛を教えてくれる「まことの光」が必要なのです。そしてそれは、私たちの主イエス・キリストです。

先ほど、「神に受け入れられているという深い安心・平安」を得ることが決定的に大切なことであると言いました。また、それは「神に愛されていることを知る」ことでもあると説明しました。みなさんは、どういう時に、受け入れられていると感じ、愛されていることを実感するでしょうか？

その一つは、赦しを受けたときではないでしょうか？神様は、キリストの十字架のゆえに、私たちの罪を赦してください、そして私たちを神の子どもとしてくださるお方です。12節にも「この方を受け入れた人々、すなわち、その名を信じた人々には、神の子どもとなる特権をお与えになった。」とあります。私たちは、神様の言葉に従わずに、神様を無視してきたのに、神様は私たちを赦そうとしてくださいました。そして私たちを受け入れてくださる道を、キリストの十字架によって用意してくださいました。

私たちは、イエス・キリストを信じたときに、神の子どもとされました。神の子どもとして迎え入れられ、受け入れられました。ここに世が与えるのとは違う平安があります。子どもというのは、無条件に愛される存在です。神の子どもとされたということは、神様の愛を無条件に受ける者にされたということです。神の懐に憩うことが許されているのです。

私たちの主イエスが、それとは逆に人々から受け入れられず、拒絶され、最後には十字架刑に処されて殺されてしまうのをしりながら、この世に生まれてくださったのは、私たちにその平安を届けるためです。キリストの十字架による赦しを、私たちに与えるためでした。ここに私たちの生きる道、そして「いのち」があります。「この方にはいのちがあった。このいのちは人の光であった。」とヨハネも、4節で私たちに教えてくれています。

約2000年前に私たちの主イエス・キリストは、この世界を造られた神があなたを愛しているというメッセージを携えて、この世界にお生まれくださいました。これが私たちが今も、クリスマスをお祝いする意味です。お祈りしましょう。